

龕 龍 NICHE

工学院大学建築学科同窓会誌 No.7 1981

龕 NICHE

がん【龕】 ①仏像を納める厨子。②棺(ひつぎ) —広辞苑—

ニッチ【niche】(獨Nische)、がん(龕)とも書かれる。壁体内に掘られ、多く平面半円、半円筒状で、上に $\frac{1}{4}$ 半球をいただく凹所。彫像などを置く。—共立・建築辞典—

niche (nich), n. [Fr. niche, from L. nidus, a nest] 1. a recess or hollow in a wall usually intended for a statue, bust, or vase. 2. a place or position particularly suitable for the person or thing in it. —Webster's New Twentieth Century Dictionary—

ニッチ No.7 目 次

*ごあいさつ

乞食でない乞食＜伊藤ていじ＞…… 2

会長挨拶＜小高鎮夫＞…… 3

*校友会・同窓会合併経過報告…… 4

*昭和55年学内コンペ報告…… 5

*遙かなる長安…… 8

*私の建築人生……10

松本先生に聞く……16

*建築学科25周年記念祝賀会記録……20

*建築対談

これからの建築について語る……23

*第14年度事業報告及び第15年度事業計画……26

*大正6年築地回想……28

*スポット……28

*運営委員名簿……29

乞食でない乞食

学 長 伊 藤 ていじ

東京の或る ところということにしておこう。ひとりの女乞食がいた。みじめな女と思う人がいるかもしれない。しかし彼女は、ひとつの哲学をもってそれをしていた。だからそれなりの自尊心をもっていた。それに彼女は、乞食群の頭目であり、縄張りの保護者であるとともに、乞食道実践の指導者でもあった。実際のところ与えられるにふさわしいものを乞食が持っていなかったならば、与える人は少ないか殆んどいないであろう。それはコジキではなくしてコツジキなのである。

そうした乞食についてのフランスでの話である。ひとりの乞食が、冬の寒い夜にみじめな姿で街を歩いていたので、おまわりさんが収容所につれて行って保護しようとした。しかし彼はその保護というか恵みというか親切というか、それを拒否した。俺は好きで俺のやり方で生きこうしているのだから、かまわんでくれと答えたという。そして翌日、彼は凍死体となって発見された。

これを私たちは愚かな考えだと思うこともできるだろう。しかし彼は少なくとも、常人にはもてない哲学と主体性をもっていた。その意味で彼は立派な男である。

そこで私は学生にこう言うことがある。「一流の仕事以外はやるな。二流の仕事をする手も目も汚れる。そんな事をするなら飢え死にしたらよい」と。実際のところそうはいっても、それを実行する学生は殆んどいない。しかし百人にひとりとはいわない。せめて千人にひとりくらいは、冒険に一生を賭ける人間もいてもいいのではないか。

もちろんそうしたからといって、うまくいくという保証はないし、私もその不成功の責任をとろうとは思わない。しかしたったひとりでもいい。そういう人がいたら本学のいっそうの発展の牽引力となるのだと、私は思っている。

会 長 挨拶

建築学科同窓会々長 小 高 鎮 夫

1976年に建築学科同窓会誌が発刊されて以来、丁度5年を経、ここに第7号を皆様のお手許にお届けできますことを大変うれしく思っています。この間、同窓会、校友会、学園それぞれ様々なことがありました。それぞれの動きについては、総会通知・学園同窓会報（No.11号迄）・校友会報等によりその都度報告されておりますが、この5年間の特に重要な出来事を報告させていただきます。

第一に、昭和54年9月2日、校友会、同窓会の合併が行なわれたことであります。それにより建築学科同窓会にも、大学以後の卒業生に加え、工手学校、工学院、短期大学の建築・土木の出身者が入会し、初めて工学院大学90年の歴史が、又光栄ある100周年への歩みが校友会の組織として自分達自身のもとになったと言えます。

第二に、昨年11月3日、京王プラザホテル南館エミネンスホールにて、建築学科同窓会と建築学科の2団体の後援のもとで、“建築学科開設25周年記念祝賀会”が開催されたことであります。その席上、特に日本の建築界にすばらしい足跡を残されました、本学名誉教授下元連、第一生命顧問技師松本与作、両氏に功労者表彰として、金メダルがそれぞれ送られたこと。又、500名にも近い参加者で、梅村日本建築学会々長始め多数の来賓者を迎え、盛大に祝賀会が行なわれたことは、特に印象の深い出来事でした。

第三に、伊藤鄭爾（建築学科教授）学長及び前島為司（大14・工手・72・建）理事長が共に建築関係の方々であり、そこで、南迫哲也助教授による白樺の山の家（52年）山下司教授による新宿校舎・南館（53年）、武藤章教授による八王子図書館（54年）、波多江健郎教授による富士吉田セミナーハウス（55年）がそれぞれ建築学科の先生で設計されたことは、私達建築学科の卒業生にとっては大変に心強い又長い間待ち望んでいたもので

した。

第四は、90周年記念事業募金ですが、皆様方の御協力によりまして56年3月4日現在、申込状況は2億3千万円、内卒業生は5.5千万円となっております。所期の目標10億に対し大幅に低い額ですが、それにより富士吉田セミナーハウスの建設が可能となり、この度竣工式を迎えました。又、この募金には前島先輩始め工手・工学院の卒業生、建築会社を中心とした各企業の大口寄付が含まれておりますことを合せ御報告させていただきます。なお富士吉田セミナーハウスは私達卒業生も利用出来るとの事ですので、詳しくは学園の法人にお問合せ下さる様お願い致します。

第五は、建築学科同窓会の運営委員会の組織改変のことですが、従来の卒業年度別から研究室別による委員で構成されることになりました。各研究室がOB会中心に堅系列で、下部組織を把握して頂けることにより、今後の同窓会活動がより活発化されることが期待されております。学科開設25周年記念ではこの組織が建築学科と連動し、その機能を果しました。勿論工手学校・工学院・短期大学及び研究室のない卒業生等のグループは別に組織されております。

第六は、名簿の発刊です。今回は校友会と同窓会の合併記念号ともいえるもので、土木建築を卒業した先輩、又大学・大学院の卒業生が全て網羅されております。索引もついておりますので、前回よりかなり使いやすくなっております。皆様の御利用をお待ちしております。なお卒業生には卒業記念として無料で配布致しております。

現在、学校では、新宿校地に都市型大学を建設するべく、学園創立100周年にむけ、学園将来計画委員会のもとで着々とその準備に入っております。新宿副都心における高層ビル街の新しい型の大学、それが明日の工学院大学です。

21. ELEVATIONをもっと研究されたい。

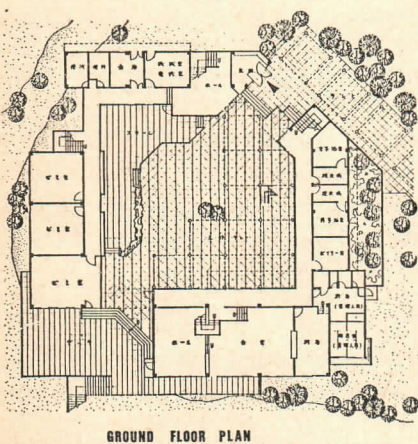
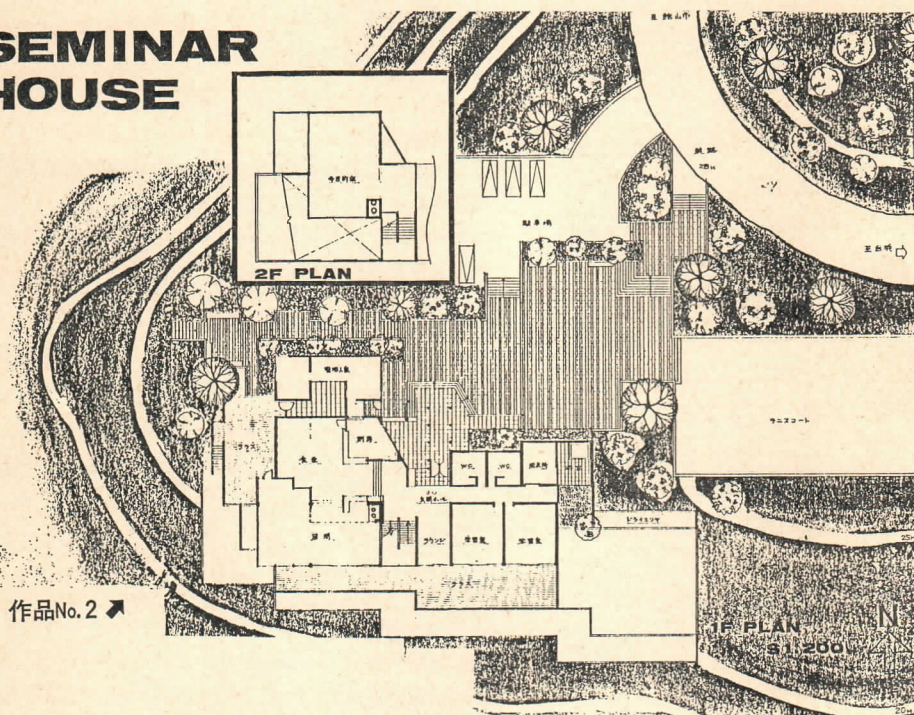
中嶋先生評

1. 平面的な発想，無理がない。そつなくまとめて，挑戦性に欠ける。
2. 比較的地形とたたかっている。開放性を強調すればさらに良し。
- 3.
4. 山小屋のロッジに近い。海を生かしたダイナミ

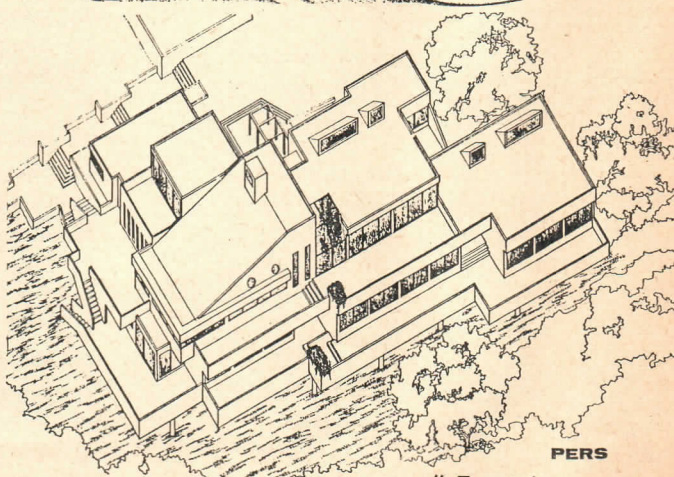
ックなポイントがほしい。

5. 内陸的な立場での発想に近いと思われるが…。
6. 建物のまとまりと，立地条件との関係が一寸無理のようだ。
7. パタートしては並みだが，がんばっている。融通さが無い。
8. 比較的に良くまとめている。地形をもっと表現してほしい。
9. No. 1, No. 2 は格段の差がある。No. 1 にしぼって

SEMINAR HOUSE



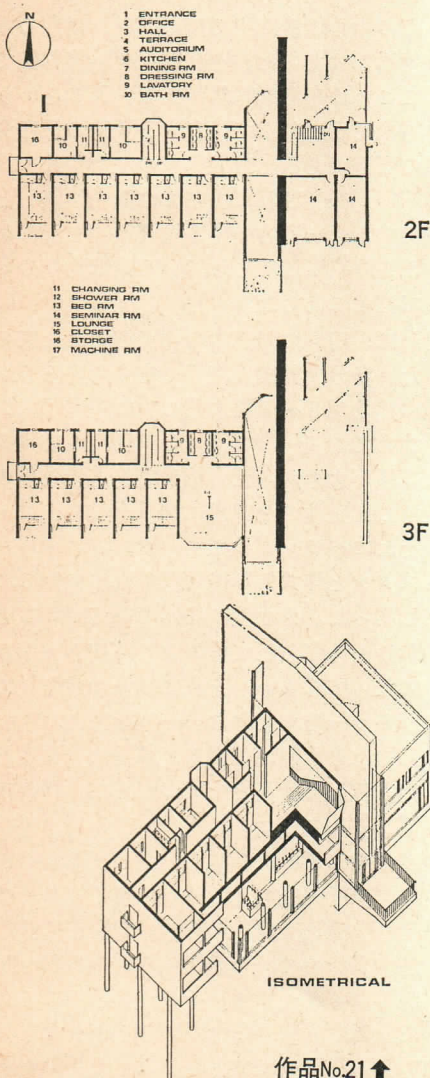
作品No. 8 ↑



作品No. 4 ↑

がんばるべき。

10. 創造の楽しさはあるが、人間的な開放性と自由性をより強くしたい。
11. 形態のおもしろさが生かしきれていないのは、プランにしがみついているからか。
12. 開放性をもとめての挑戦の努力は理解されるが、表現的に時間ぎれ。
13. 城郭の物見場の発想はいいが、生活の楽しさに欠けている。



14. スタディはいいが、建築設計としての時間のかけかたが少なすぎる。
15. 海をもっと建築に引きつけることだと思う。
16. 比較的上手にまとめている。少々夢と希望をもっと出してもいいのでは。
17. 他人の別荘的発想の点ではいいが、自分の個性もっと大切に。
18. 設計表現的な意味ではいいが、自分の個性を。
19. 屋外空間の取あつかいをもっと意欲的に処理すればいいのだが。
20. 考えすぎは、結果的にはつまらぬものになってしまう。
21. おもしろさはないが、設計のミニマムを保持している。もっと自分を出すといい。

南迫先生評

1. Plan は良いとして、Elev が不明確。
2. 食堂から居間への Rotation よい。構造が乗るか。
3. 屋根面が気になる。
4. 分棟と本棟とを位置を横にずらすべき。
5. 勾配屋根の必然性なし、柱が多すぎる。
6. コアの位置悪し、大きすぎる。
7. 機能図データラメ、プランとも合致しない。
8. 中庭の木が上に出ているのがよい。
9. 屋上ステージの Section が欲しい。海景との関係を…。
10. 形が整理されていない。
11. 左右対称がなぜよいのか、その必然性。
12. 練れていない、アイディアとしてはありうる。
13. Public Space を景色に面するようにつくるべき。
14. 概念的図式で終わっている。建築化せよ。
15. 個別棟をもう少し右へずらすこと。大ホールに配りよ。
16. 面積配分悪し、Public Spaceを豊かに。
17. 勉強が足りぬ。
18. 2段、3段ベットか？ 収容人数不足。
19. 隣棟間隔ムリなシステム。
20. Wingと中央とのつながり方がよくない。
21. 唐突にして豊様。

総評 海への総合的な Attach が乏しい。

建物内部のノビヤカさが不足。
どんな生活の豊かさを求めているのか、イメージ不足はなはだしい。
構造的工夫に乏しい。

遙かなる長安

助教授 山 崎

弘



大雁塔（西安市内）

東京を出発して早や3日目、我々の日中友好日本民俗建築学会訪中団一行は小雨降る古都西安の空港に到着した。肌寒い(20℃)、北京の暑さ(30℃)が嘘のようで、あらためて中国大陆のスケールの大きさを感じさせられた。

馴れない団長を仰せつかったので北京では表敬にとまどってしまったが、次第に馴れて事をスムーズに運べるようになった。トラップを降りると中国建築学会西安支部長、秘書長が雨の中我々を暖かく出迎えてくれた。ローカル空港なので人混みもなく、割合に閑散としていたが、物珍らしそうに凝視の眼差しで我々一行をみつめる男女の群がりがあった。そんな姿を横目で見ながら、すぐにマイクロバスに乗込み、スケジュールの都合で休息する暇もなく、陝西省博物館の見学に急いだ。

西安は中国大陆の略中央に位置し、現在は人口160万の陝西省々都であるが、かつては長安と呼ばれ唐時代の都であった。また日本の奈良平城京のモデルにもなり、遙かに遠い国そのヘレニズム文化を運んだシルクロードのターミナルでもあって、住居の歴史を語ってくれる古都として、日本文化のルーツを訪ねた気持で一ぱいになった。時代を経て現在の規模は約 $\frac{1}{6}$ に縮小された明代の区画となってしまった。

マイクロバスは旧市街に入った。槐や柳の老木の生い茂る並木の隙間越しには、古びたレンガ造や木造のぎくしゃくした2階建が建ち並んでいて、まるで歴史を語っているようでもあった。人の雑踏はどここの都市でも同様であったが、荷馬車や自転車の往来は歴史の町が新旧の交代を告げているようでもあった。かつては異邦人を混えた賑いがあったのであろうか。旧市街の町並を通り抜

け、町の中心鐘楼に出て南に向い、南門の東に陝西省博物館はあった。それ程大きい博物館ではないがここには有名な碑林がある。碑林というのは公文書類を石に刻んで保存する独特の保存法で、一種の石碑である。11世紀末の北宋時代に既に唐代の石経が保存され、現在では館内処狭しと立ち並んでいる。一番古い中国地図も刻まれており、総数1,100点が数えられている。博物館の見学を終って宿舎に向った。

それは、田園のど真中の塀で囲まれた森の中にあった。多分、外国人専用の宿舎であろうか、2階建の建物が5~6棟木蔭の中に配置されていた。北京でもそうであったが団長は特別扱いされ、部屋が大きかった。執務室と応接兼用の部屋と寝室の20畳敷の2部屋に10畳敷のバス・ルーム、それにベランダ付であった。バス・ルームにウェスタンと洋式便器が用意されていたのには驚いてしまった。兎小屋に住んでいる私にとっては、背中から擦られているようで何ともおかしい気分になってしまい、それに輪をかけて蚊の襲来でとうとう一睡もできない一夜を過ぎてしまった。朝みたら網戸は破損し、部屋は普通使われていないとみえて黴臭さもてつだって、何か有難さも半減してしまった。

中国の朝は早い、7時の出発である。今日のコースは先ずは西安の北西80kmにある唐代の第三皇帝とその皇后則天武后の陵墓『乾陵』の見学である。道中長いので、車窓からのどかな中国をみた。限りなく続く耕地、そのところどころに塊になった土塀の農家、田舎町の朝市どれをとっても変化に富んだ風景であった。田舎道とはいえ、延々と続いた緑のポプラ並木は毛主席の国土緑化運動の一環で、清潔さとするすがすがしさが漂ってい

た。道も舗装が行届いていたが、ここでは道は車のためだけでなく、小麦の収穫期になると道の片側半分は収穫物の干場に替ってしまう。地面が舗装なので、干物は乾燥し易いし、自動車が踏みつけていくので脱穀になって、夕方それを掃き寄せ袋に収納すればよいのであり、まことに合理的でユーモアに富んだやり方は何とも微笑しい風景であった。日本でも明治期にはこんな風景がみられたと誰かが言っていた。

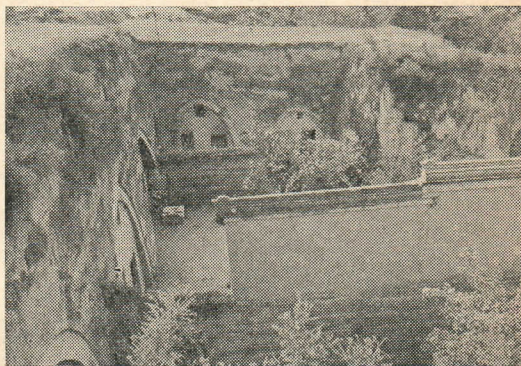
ポプラ並木の隙間から近くに、遠くに土の塊のような農家が覗かれた。高い土塀に囲まれた構えは正面に小さな入口の大門、土塀上に見える交錯した屋根型は、かつての旧地主階級の三合院、四合院形式をおもわせる。屋敷を囲む土塀の築法は底辺70cm、上部40cm、高さ2mの台形に干レンガを積重ね、粘土質の土を塗り上げていき、それをほぼ一間（180cm）単位で仕上げ継ぎたしていくのだそうだ。だから一間ごとに縦線が入っていると同行の秘書長が話してくれた。建物は一部土塀を壁面として利用し、奥行きが浅い場合は片流れ、深い場合は切妻屋根を架けて棧瓦を葺いていく。こんな話を聞いていると日本の藁葺民家にはない土の造形の味わいがあるように思えてならなかった。睡眠不足の目をこすりながら、何でも見たい、撮りたいを繰り返しているうちに前方に大和三山ならぬ乾陵の秀麗な三山が望まれた。まるで奈良を旅しているのかと錯覚にとらわれる。梁山の三山の一つにある乾陵は海拔1,047mの中腹に埋葬され、その囲りには復元によると大小の建物が300も建てられていた。第一道門から中心部までは3kmもあってその参道には、翼馬、石獅子、侍衛將軍像が残存し、当時の権勢を物語っているようであった。この乾陵は周囲には太子や皇女の塚も多く、多くの出土品も数えられている。

例えば乾陵から2km下ったところに乾陵博物館がある。その構内には則天武后の地下墓があり、儀仗兵の俑（埴輪）や壁画が飾られている。そのうちの壁画「観鳥朴蟬」の画法はまさに奈良高松塚古墳の壁画とそっくりであった。やはり古代文化のルーツはこんなところにあったのかと確めた。りした。

またこの地方には窑洞住居が残存していると聞いてはいたが、モニュメントの見学が中心では見

られないものと半ば諦めてはいた。なにげなく乾陵の緩やかな参道より少々隔れた川端で洗濯する女群を写真に撮っていた時、前方の草むらにぽっかりあいた大きな穴をみつけた。近ずき恐る恐る覗き込むとまさしく自然の侵蝕作用によってできた断崖の窑洞（横穴）住居であった。中庭の地面までは6～7mはあるであろうか、中庭を囲んで断崖の3面に洞を掘込み、一方の土塀に出入口の門を設けた。各面の洞部分には磚を積重ねて表面に黄土を塗り、入口、入口脇の格子窓、上部の矩形の換気孔を全体の大きな円形アーチ、尖頭アーチの線型で描いた素朴なファサード、あるいは鋸刃型の持送りを二、三重に持出して絶破風にした屋根底をつけた立派なファサードなどがあった。これらはいずれも幅3m、奥行6～7m、高さ3m位のアーチ型横穴住居で、坑（オンドル）のベットと衣服箱や穀類を入れる瓶があるくらいの質素な内部であった。この他に並列した窑洞住居も二、三見ることができたのは幸運であった。このような住居は河南、山西、陝西、甘肅省など、湿度の低い黄土質の土地にはまだまだ残存しているのかも知れない。

ここ乾陵から昭陵に向い、帰路俑（埴輪）製作工場を見学して今日の全スケジュールは終った。西安には新石器時代の半坡住居跡、唐代の各種の陵墓、玄宗皇帝と楊貴妃のロマンの地華清池（温泉）、市内では玄奘法師ゆかりの地興教寺、仏典を保存した大雁塔、小雁塔など歴史を語る遺跡や建物は枚挙にいとまがない。西安5日間は私の新しい発見であり、遙かなる中国を垣間見た旅でもあり、中国の無限さをいやがうえにも見せつけられた思いであった。



窑洞住居（乾陵附近）



25周年記念功労賞の金メダルを手にして

本日はわざわざ皆さんおいで下さいまして本当に恐縮でした。私は、ご存知でしょうけれど、去年の9月で丁度90歳になりました。ですから今年は91歳ということになります。知らず知らずに年をとりまして、私はとろうと思ったのではなく自然にとってしまったのです。それでもおかげで健康でございまして、こうしてお話していますが、今になって幸せだと、こう考えております。同時に、皆さんにお会いすると、私自身も皆さんの年頃があったことを思い出します。随分苦勞いたしました。

ところで先頃、建築学科の25周年の祝賀会にお招きいただき、功労賞を丁戴しまして大変恐縮しております。これは記念で非常にありがたくいただいてまいりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

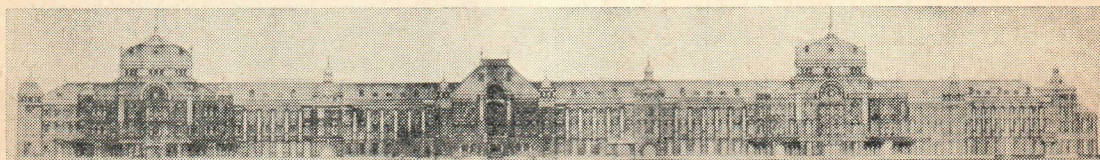
今日は時代からいうと割に新しい部分で、私も

私の建築人生

松本 与作

いくらか覚えているところを中心に話し申し上げたら、あるいはご参考になるかもしれないと存じます。ああ、そんなことがあったのかということがあるかもしれません。日にちは余りはっきりしませんからそれは抜きにしまして、思い出すまにお話したいと思います。

私は明治40年に学校（工手学校）を出ました。いろいろ苦勞もしました。幸い辰野金吾先生のそばで13年、非常に厳しく建築の設計、技師法を教えていただいて。ご承知でしょうけれども辰野金吾先生は東京駅を設計された方です。その当時、丁度先生が東京帝国大学の工学部長をなさっておられたのです。それまでは官庁の仕事をやっておられましたが、「民間で設計しなくてはいかん」、ということで初めて、先生が50歳になられたときに新橋の日吉町に建築事務所（辰野葛西事務所）を開かれて。これが今日の建築事務所の初まりです。私がちょうどそこへお世話になることになりまして、色々仕事（設計）をしましたが、辰野先生から東京駅の設計を実際やれといわれまして。まだ若うございましたが担当したのが東京駅の設計。そのようなわけで、建築家というものはこういうものだという、建築家精神とでもいうものを、私は実際しっかりと叩き込まれたと思います。今でもよく覚えておりますが、「アーキテクトとい



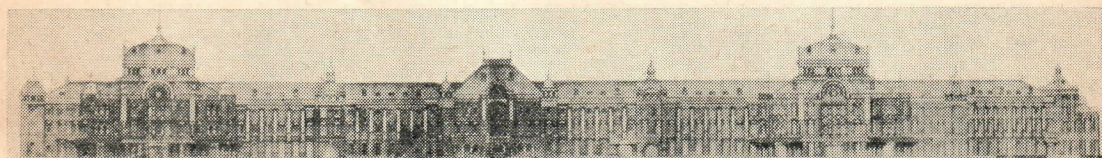
うものは立派なひとつの仕事であるし、また技術家であるし、芸術家でもあるのだから、プライドを持ってもらいたい。」というようなことを言われました。それについて細かい話はたくさんございますけれども、根本精神はそういうことで、そうして設計は誠心誠意やっていく、というようなことで東京駅の設計を行ないました。まあその当時は、今でこそ整然としておりますけれど、鉄骨の計算をするとか、あるいは構造の図面を画くというようなことなども、探り探り行っていた時代です。製図もイギリスの直輸入です。アメリカではありませんが、鉄骨の計算なども良くわかりません。探り探りやっておりました。

その当時、佐野利器先生が東京帝国大学におられまして、「意匠よりも構造が得意だから構造をやれ」ということを辰野先生に言われまして、佐野先生は地震のオーソリティになられました。構造の大家になられたわけです。まだ大学の時分でしたが、しじゅう事務所へ来られまして、「わからんところを調べてこい」「ではやってみるか」。ということで東京駅の設計をやっていたわけでございます。たまたま東京駅の設計担当主任が松井清足という人で、佐野氏と同期でございましたから、わからない所がありますと「佐野君、図書館へ行ってこれを調べてきてくれ」ということで調べてもらいまして、私共もそれを聞きながら計算をして図面をつくりました。また、計算はゼロからやって行くのですけれども、図面の書き方がわかりません。どうしたらいいだろうか、というわけで、石川島造船所の図工2人に来てもらいまして、計算したものを図面に画いてもらい、それに習って私共も画きました。そのような時代であったわけですから。それは明治の終り頃です。間もなく

明治天皇が崩御され大正天皇が即位なさいまして東京駅(それまでは中央停車場という名称でした)よりご発輦になりましたのが東京駅の開所式ということになります。これは大正2年のことでございます。

大正3年頃のことでございます。第一生命保険相互会社の矢野恒太社長が、京橋に500坪ほどの土地があるのでそこに本社を建てるということで、辰野金吾先生が一番のオーソリティだからということで依頼にられました。今度は第一相互館の設計を相当いたしまして引続いて現場も担当いたしました。現場監督主任でした。京橋の第一相互館です(既に取壊されています)。ところが戦争(第一次世界大戦)が興りまして、なかなか早く出来ませんでした。鉄骨などは未だ日本では出来ませんでしたから、イギリスのドロマンロング社に注文したりしていましたので遅れまして6年掛りました。大正10年でした。大正8年に辰野先生はなくなられております。

竣工しましたので事務所へ戻ることになりました。そうしましたら、第一生命社長の矢野恒太氏に呼ばれまして、「君は辰野先生の生前に、これ(第一相互館)が出来たら第一に貰うことに約束が出来ているのだから、第一生命に来てくれ。」ということでした。私は保険はあまり好かないのですが、「いや、そうじゃないんだ、君は何度かアメリカへ行って、あるいはヨーロッパへ行って勉強したい、そう言っていたそうだね。」それは事実で、工手学校を出まして実際に建築をやってみまして、余程やらなければだめ、勉強しなければ、人のことではなく自分のことです。日本の大学に行くわけにはいかないし、それに辰野先生の事務所にはイギリスで勉強してきた人がいました。ア

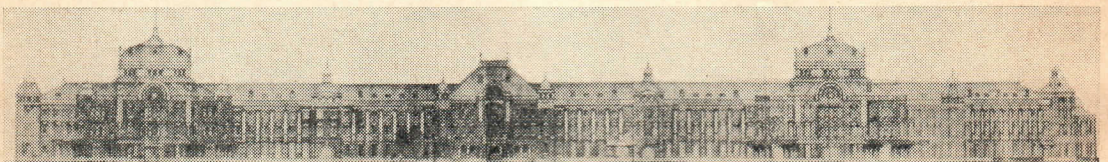


アメリカで勉強してきた人も、行くところが無いので皆辰野先生のところに來られるのです。そして一緒に先生に教わりながら図面をひくのです。日本の大学を出た人もいました。ところがアメリカ、ヨーロッパから帰ってきた人の方が上手なのです。これはひとつ、直輸入時代でしたから、まずアメリカへ行って10年勉強してやろう、と。それには早く行かないと歳をとってしまいますから、というので、20代に辰野先生に「私はアメリカに行きたいので、第一相互館の現場の基礎が出来ましたら私をやって下さい。」と、「まあちょっと、もう少し待てよ」。そうやっていますうちに何年か過ぎました。もう鉄骨が出来ました。鉄骨が出来ましたから「ちょっとやって下さい」。「まあ、もう少し待てよ」。そうやって6年引っ張られました。だんだん歳をとりました。私も困りましたが、「待てよ、待てよ」と、いわれているうちに辰野先生は亡くなられたわけです。余談になりますが、辰野先生の病気がだんだん悪くなられて、もう今日明日かということになりました。事務所の人々も心配いたしました、夕方現場が済みますと先生のお宅へ伺いました。

先生のお宅は赤坂にございまして、そこに休んでおられました。私共は1階の応接間におりまして、2階に先生は寝ておられました。「親父が呼んでいるから」といって2階から息子さんの保さんが私を呼びに來られました。先生は酸素吸入をしておられました。おそばには侍医の大谷博士・葛西博士、それから曾根博士と奥さんと息子さんがおられました。「何か親父が呼んでいるから」と、私を引っ張り出されたのです。先生のおそば近くに伺いますと先生は何かお話しになっておられる。耳をそばだてますと、第一相互館の工事に

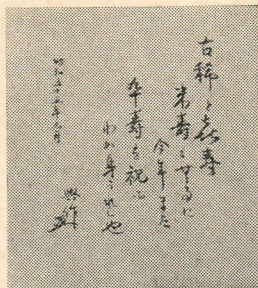
ついてのお話でした。その時私は、それまでアメリカに行きたいとか、ヨーロッパに行きたいと頼んでいましたが、このように先生がご臨終の間際まで第一相互館の心配をなさっている様子を見て、「今、私が現場を離れたら辰野先生は極楽に行けないぞ。アメリカもヨーロッパもどうでもいい」と、すっかり断念いたしました。私のことを知っているのは辰野先生だけで、他の人は誰も知らない。先生が亡くなられたらどうしようもありません。このような時に現場を離れるわけにはいきません。「何年掛っても竣工させよう。」と決心いたしました。辰野先生がご臨終の時でございます。先生が逝去されてから2年後第一相互館は竣工致しました。そして先ほど申し上げましたように第一生命の矢野社長に呼ばれたわけでございます。

「僕が君の洋行を長引かせたんだ。すまなかったけれどもこれは仕方がないんだ。君は10年行くというけれど、今帰って来るならいいが、これから10年行ってきたのではもう遅い。だから2、3年でいいからアメリカだけでなく世界を廻ってきなさい。いままで君のやってきた経験とアメリカ、ヨーロッパのすべての建築と比較、研究してきなさい。少々金がかかってもいいから十分に勉強してきなさい」。この話を聞きして私は大変驚きました。初めて聞くことですし断念していたことでしたので、第一生命は営繕課を新設して初代の営繕課長を拝命致しまして第一相互館竣工の翌年（大正11年）欧米旅行に出かけました。実際の仕事をしている建築事務所へ行きましたり、大学を廻ったり致しました。「建築の講義を聞かせてほしい」といいますと、向うの人は割合親切にみせて下さいます。言葉が違いますから十分にはわかりませんが、建築のテクニクは同じでございますか



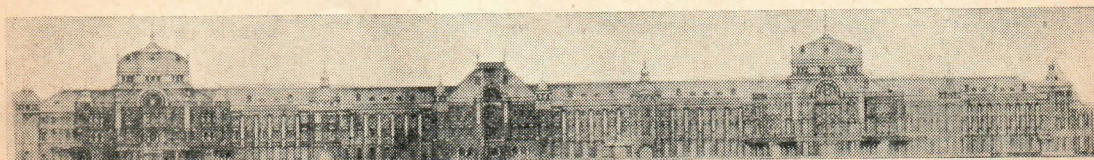
らいくらかわかるような気がいたします。カリフォルニア大学へ行きまして男女共学でございました。その時分、日本では男女共学などはございません。のんびりと若い男女と一緒に勉強しておりました。「ああ、このように一緒に勉強するのはいいな、」とつくづく思ったものでした。建築の講義を聞きに入りまして、後の方で聞いておりますと、一番前の席に女の子が4人位座っておりました。一生懸命聞いております。構造の講義だったと思います。「おかしいな。女がやっているのは、あれはどういうのだろう」。今と違いました非常に不思議に感じるわけでございます。「女の人が建築の大学に行って何をしているのだろう」。それで下宿のおばさんに聞きましたところ、「その女の子は多分、家政科か何かを卒業して、建築家のところへお嫁に行くつもりで建築常識を勉強するために学校へ行っているのです」。そう聞きましたとき、「なるほどアメリカというところはそんなところかしらん、お嫁に行く人も勉強してね、いい考えだな」と、思ったことがございました。

各地を廻りまして約2年目パリにありました時でございます。関東大震災（大正12年）を聞きました。丁度帰国する時期でございました。その時、一番気に掛りましたのは第一相互館でございます。帰国しまして直ちに第一相互館に参りました。周りはすっかり焼けており建物も類焼しておりましたが建物は無事でした。矢野社長に「ああ、君帰って来たか。あの周りの家は皆潰れたが、あれだけはちゃんと建っている。どういうわけなんだろうね」と、聞かれました。私は「私もよくわかりませんが、同じ材料を使っているんで壊れない。精神の入った建物は壊れないのしょう」と、答え



ましたら、「いやそうかしらんね」。そんな話がございました。

その後第一生命営繕課長として、保険はやらなくてもいいから建築をやりなさい。ということで、第一生命関係の全国の支社を作りました。そのうちに京橋の第一相互館が手狭になって参りました。それで日比谷の第一生命館の計画が始まりました。それは昭和3年頃から考え始められました。矢野社長が「君、思う存分やってみなさい。君、勉強して来たんだらうから」と。「どのような建物を作るのですか」。「どんなものといったって、僕にはわからないから、立派というよりも、生命保険は何かの場合には加入者に保険金の支払いをしなければならない。場合によってはこの建物も売って支払うかもしれない、そのためにはそれだけの値打ちがないといけない。だから資産なのだ。立派にする必要はないけれど天災地変、人災などすべてに耐えられるよう丈夫にしろ。あとは存分にやりなさい。少々お金が掛かってもよろしい」。建築家として注文主が注文をつけない建物というのは普通ございません。ですから日比谷の第一生命館は私にとって子供のようなものでございます。第一生命館の設計についてお話いたしますと長くなりますが、スタイル、意匠・構造から設



備まで全部おこなって参りました。「まあ、もう1人相手がいなきゃいかんから、渡辺 仁と2人でやりなさい」ということになりまして、2人で共同設計ということで竣工しましたのが昭和13年でございます。昭和20年、第二次大戦に負けまして米軍が進駐して参りました。第一生命館は米軍に接收されました。

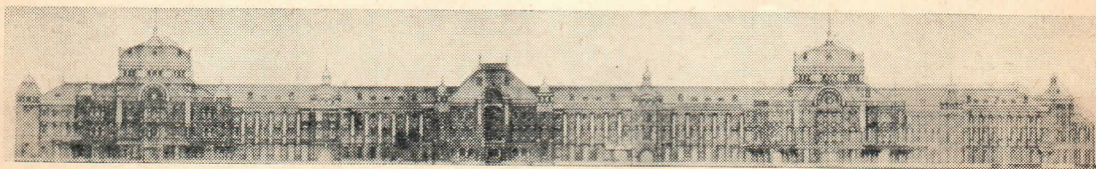
接收というのは建物を米軍に取られるわけではなく、日本政府、外務省が第一生命から借りて、それを米軍に提供するわけです。接收に際し第一生命館を当初から手がけています私が建物の管理者として残りました。外務省より「GHQ第一ビルマネージャー」という辞令をいただきまして5年その任に就きました。（この辺のお話は矢野一郎著「第一生命館の履歴書」によく書かれています。）

ところで工学院大学のお話になりますが工学院大学は当初「工手学校」でございましてそれが「工学院」となったわけです。私自身とすると、自分の出た学校に自分の子供を「いい学校だから」といって行かせたいわけです。ところが工手学校では「行け」といいにくいのです。「もっと他所へ行けよ」、「あそこに行けよ」ということになります。それがいかにも情けないような気がしておりました。私は個人的にも岡田先生に「なんとか大学にして下さいよ」と何度か申し上げておりましたが、なかなか簡単には参りません。私がGHQに出向しております昭和22年に学校制度が変わりまして短期大学が出来るということを耳にいたしました。「さあまだ。いまこそ工学院がやってくれなければ困るのだ」と言っておりました。昭和23年大学設置準備委員会が設立されまして、翌年機械工学科と工業化学科の設置を見ました。数

年を経まして二部に短期大学が設置され建築学科（短大）は昭和27年に開設されました。

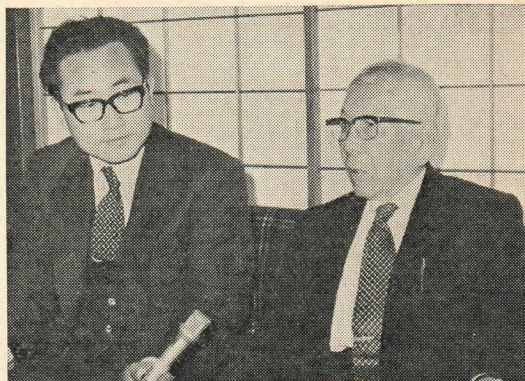
建築学科を設けるという時に、まず短期大学を作ろうということで、野口先生（野口尚一学長）から建築のことをよく調べるように言われました。その時、山口章三郎先生（機械工学科教授）が私共卒業生と一緒に心配して下さいまして、短大をつくるにしても資金を集めなければいけない。それをどう集めるか。それから建築では設備をしなければならない。どの程度どうすればよいかなど、山口先生にご同道願いまして早稲田大学へ行き調べました。山口先生には色々大変お世和をいただきました。資金を集めて整備しなければ認可にならないということで、その仕事を私と瀬戸強三郎さん、それから尾山和孝さんの3人で駆け廻って集めまして短期大学の開設に漕ぎつけました。しかし短大だけではいけない。なんとか大学にしなければいけないということで又頑張りました。2年位遅れましたが、不足の施設を又整備致しました。これにも又お金が掛ったわけですが、短大の時も大学の時も施工会社の方へもお願いに伺ったものでございます。大学が出来ましたら先生も卒業生も寄ってくれてましてあとは学校がうまく行けばよいだけとなりまして私は自分ながら本当によかったと自己満足致したものでございます。

そうしましたら野口先生（学長）が、「松本さんご苦労さんでしたけれども、今度は同窓会をひとつまとめて下さい。」とおっしゃいました。それでまた瀬戸さん、尾山さんそれに私の3人でどうしようかと相談致しました。戦争前に築地同窓会というのがございまして、菊地君（武一）あたりが世話をしておりました。1人5円ずつ出して



紙を求めまして、名簿の整理をしようと、はじめましたが、築地同窓会でございます。戦争でバラバラとなりまして、同窓会名簿もなくなってしまいました。集まる場所も無くなりまして、大森にございました大川さんの事務所に集まりました。

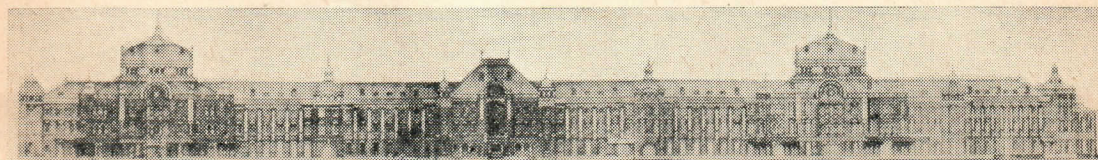
私共が工手学校、工学院というておりますと「程度が低い」とおっしゃる方もいらっしゃいました。又大学が出来ますと、「大学を出る人があるのだから、それとは一緒ににならないだろう」という人もいました。そういう人に私は、「あなたは一体何を考えていらっしゃるのか工学院に大学ができた。大学を出てきた人の私達は先輩じゃないか。私達は学校の制度が変わってきたからそうになってきたのだけれども、筋を通せばこれはズーッとひとつのものなので、親があって子供が生まれて孫が出来て、順々に変わっていくもので、筋は一つなのだ。親はどこまでも親なのだ。大学と名前は付くかも知れないけれど、私はむしろ大学卒業者の先輩なのだ、それくらいの覚悟をしていますよ。」と話しておりました。色々曲折はございましたが、とにかく校友会が出来まして初代会長に野口先生になっていただきました。大学の卒業生がみえたとき、「自分達は大学を卒業しました。先輩よろしくお願いします」といわれた。「よかった、おめでとうございます」。私もうれしくてそういいました。そこで校友会の話が出まして、あなた達もひとつ一緒になってやりましょう。私共は古くし引っ込んで新しい大学の教育を受けた方々が続いてやって下さい。」といいますが、それは先輩がやってもらわなければどうしてもできないから、「私共は若いですから、使い走りをいたしますので、やって下さい」とこういわれました。実



小高会長

松本先生

にきれいな話ですね。「ああいいことだね。お互いにやっていきましょう。」といいました。しかし校友会の方へもだんだん足が遠くなっていきました。そのうちに、大学の人が同窓会を作りました。校友会がある。同窓会がある、「おかしいことをしているんだな」。私は名前はどうしても、1本のすつと線の連がったものがあり、それに分科会として築地の連中は築地会を大学を卒業した人は同窓会というものがある。分科会はいくつあってもいいが、大元が一つ出来なければいけないと思っていましたから、いろいろあったらしいですが、それがひとつの固りとなりました。大変よいことだと思っております。これからはそれこそ若い人達を中心となって卒業生のためにも、学校のためにも活動していただきたく存じます。思いつくままにお話し致しました。(文責宮崎)



松本先生に聞く

聞く人 金尾武彦・小高鎮夫・宮崎勝弘

議院建築競技設計で一等賞を取る

宮崎 先生はいろいろな建物に関係されたと思いますがそのあたりのお話しをお聞かせ下さい。

松本 辰野葛西事務所では、万世橋駅、それを模写して、新橋駅、中央停車場、現東京駅、国技館、第一相互館（京都）等、その間プライベートに、花王石鹼本社、国会議事堂の懸賞設計、絵画館の懸賞設計なども手がけました。

国会議事堂の懸賞設計があって、名前は出ませんでしたが、力だめしにやったんです。

私達が一等の金賞を取ったんです。それぞれ仕事を持った者が、7人組というグループを作って、何でもやるんです。この話はあまりしませんが、こういう事なのです。

金尾 これは大変な事ですぞ。

小高 国会議事堂といって、そのものの…

松本 いまの議事堂です。

金尾 あの当時からコンペをなさっているという事で、どういった方法を取られたのですか。

松本 それは夜です。仕事でみんな昼間勤め終えた後の時間で。今は知らないが、私のやっているのはもっと純なものでした。

とにかく若いですわ、私も。当時、京都の第一相互館の基礎工事中でした。7人組の中に、吉武泰水現建築学会会長のお父さんで吉武東里というのがいた。彼が宮内庁に居まして、図面引いている。これが、なかなか上手なんです。ところが、何か自分の思った事をやりたいんだね。宮内庁では、こうやっちゃいかん、ああやっちゃいかん、と、思っている出来ないんですね。私は辰野事務所にいる。私にもそういう懸念がある。勝手なことをやりたいけれども出来ないという。

そこへ、議院建築—これは大きいね—思う存分2人でやったらなんとかなるだろう、当らなくたって構やしない。だから、どの位出来るかやってみよう、それは面白い、と。

吉武君は絵がうまいので、意匠設計。私は、辰野先生が構造にやかましいし、絵描けないから君も一緒にやろうという事になりました。皆は下宿しているので、ある一人の下宿に、吉武君は泊まり込んで、私は、夜一緒になって、スケッチやったんですよ。

ところが、宮内庁の重鎮が木子さんでしたが、当の木子さんが、議院建築というのは建築までやらなきゃならんものだから、おれが宮内庁でやる。という事になり、吉武君それを手伝ってくれという事になっちゃった。松本さん、おれ困っちゃった。2人でやろうと思ったのに、木子さんが応募するという事で、手伝わないわけに行かない。

それでは手伝うけれども、勝手にやらしてくれ、こうしてくれ、ああしてくれと言っちゃ困る。そのかわり名前は木子さんの名前で出します。私は名前を出したくないんだ、思う存分やらしてくれさえすれば、それでいいのだから。木子さんは了解して、いろいろあったけれども出来上った。この審査は1次、2次と2回やったんです。第1次は全国で20人残った。その20人で再度設計しました。ところが、私は辰野事務所で働いている。名前なんか出したら、こんな内職しやがってと怒られちゃう。コンペやったら叱られるから名前なんかどうでもいい。吉武君もそうでしょう。木子さんは、自分でやらなきゃ気が済まない。僕は僕でやる、と、やり出したんだ。それじゃ木子さんはそっちでやりなさい。私は別にやりますからと云う事になった。

そこで木子さんは宮内庁の渡辺福三さんを連れて来て、木子さんも作品を作ってしまった。これで2つ出来たわけだ。応募作品は暗号提出で、当選した時に木子さんが入ってくれば表向きも、世間体も良いのでした。ですから、私の作品、木子さんの作品の暗号は別々にしましょう。封書の中は両方共木子さんと申し合わせて出品した。ど

っちが入選するかわからない。それで、両方のグループで、こっちが入ったら貴方がたはこっちの家来になれ、そちらが入ったら私達が家来になる。作業の面ではそういった申し合わせもしておいた。それで、私どもの暗号は『まさかり』とした。そっちの方は『みどり』とした。

そうすると、2つ共予選で入選してしまった。この時、まだ封書名入れの封書は開きませんから、名前は伏せてあります。しかし、第2次は提出日が決まっている。どっちが家来になろうかと思案にくれてね。入選者には¥1,000円の賞金が出た。これは大きいですよ。使い手があった。

そこで2次に応募する事になったのだが、どっちでやろうという事になったんですね。

審査員の顔ぶれを見ると、どうも古い連中が多い。辰野さんとかその他が審査員だから、クラシックがきっと良い。私たちはクラシックでやっているんだ。木子さんはセセッションなんだ。まるで違っている。木子さん達も、入賞したいし、クラシックが入賞するかも知れないなと。僕らもクラシックでやって家来になるからということで、彼らは家来になった。

2次は図面が大きくなり、100分の1とか、ディテールがあって提出図面が多いのです。手間がかかるし、夜の仕事ですし、どこにも必要の広い場所がない。その折に宮内庁で、秩父宮の屋敷が赤坂見附に有って、わきに家令の入る寄宿舎の2階を貸してくれる事になった。10畳間が3つ分位かな。そこへ7～8人、みんな夜弁当を食べて12時頃迄やっていた。私と吉武君が、こっちの部屋にいてスケッチして、家来共は別室で図面を描くわけです。一つ目がちょうど締切の2週間前に出来た。まだ2週間ある。これは、もう一つのセセッションの方も入選しなくとも良いから、ダダッとこしらえて出しちゃえ、と。

今回は封書の中と暗号名を確認するでしょう。ちょうど木子さんは、宮内庁から西洋旅行に行っちゃった。それで木子さんの留守の内に提出しなければならぬので、封筒の中を誰の名にしようかと相談したわけです。暗号も変えて、クラシックの作品を『朝』とした。朝っていうのは気持ちいいからね。この方は吉武君がチーフでやったん

だからと。

吉武君は、『いや、こんなものは要らん、あんたにしろ』、『おれもいやだ』、皆若いんだ、その内の1人年長者が居て、小林福三という宮内庁の技師でしたが、この方の名前にした。セセッションの作品は、この家で一番手伝わなかった人、高島屋へ行っていた絵描きで、出来上がった背景図の影をつけた人、これが一番仕事が少なかった。その人の名前を出したのです。暗号名は『もえぎ』かな。

そしたら金賞です『朝』が金賞、2位が大阪の人、3位が『もえぎ』。賞金が出たね。17,000円と15,000円。洋行帰りの木子さんの所へそっくり持って行った。金が欲しくてやったわけではないし、名前が欲しくてやったわけでもない。当たればそれでいい。実際おれはどの位力があるか、力だめしです。その当時の人は気持も違うし、やることもやって、それにぶつつかってやって来た。

後日、木子さんが、これは私が持ってちゃいけないからと、賞金を大分くれた。それが私達の結婚の費用の足しになって助かったけども。

金尾 議院建築は結局応募者は関係なく大蔵省で自主設計となりましたか。

松本 これには後日談がある。大蔵省で、国会議事堂建築の実際をやるわけですが、宮内庁の吉武さん、他に私と一緒にやった仲間が、もう宮内庁はいやだからと言って辞めちゃって、おれは本当の議院建築をやりぬくと言って、今度は、大蔵省の議院建築の建築部へ入っちゃった。吉武君が議院建築の設計部の総元締めで、始めから原寸迄やって、16年間いました。吉武君とはそういう人でした。

建築家の根本精神

金尾 先生の建築家としての考え方を少々お聞かせ下さい。

松本 私達辰野葛西事務所の人々と交友のあった人達の事は、断片的に出て来るけれども、ありのままだから大体わかるでしょう。建築家というもの、何が一番うれしいかというと、懸賞設計でもそうだし何でも、自分の思った通りに出来る事が一番うれしいんですよ。それが出来れば金

も欲しくない、名誉も欲しくない。懸賞でもそう。金は欲しくないし、名前出そうとかそんな事を考えてない。それが出来さえすればいいんだというのが根本精神ですよ。

それが、私の一生の内に、50歳になった時に、深く感じた事でした。

年が50歳になった時、昭和13年が満50歳で、日比谷の第一生命館が出来た時でした。あれが出来た時、本当にうそでも何でもなく、もうこれで私は思う存分やらしてもらって良かったと思いました。

その年の11月3日に落成式をして、第一相互館から引越しました。

金尾 私は昭和14年の卒業ですが、工手学校では、松本先生を頼って、第一生命へ、見学に行っただんです。蔵田先生引率のもとに。

松本 そうだ、蔵田先生が来られました。

それで、ちょうど、私は50歳の時に、ああよかった、もうこれで人生一くぎり、冥土のみやげが出来たと思った。これでもう何も要らん、欲もないし、地位も名誉も要らんし、どうしたらいいのだろう。こんないい気持ちはない……。

乃木大將が明治天皇より拝命して旅順を落として、自分の子供さんも亡くなったけれども、殉死されたでしょう、あのときの乃木大將の気持ちというものが良くわかる。私にとって、日比谷第一生命館が出来た時、瞬間ですが、この建物と心中心してしまえばいいんだ、死んでしまえば一番いい気持ちで長く続くんだとそう思ったですよ。

日比谷第一生命館竣工と顧問技師拝命

松本 日比谷第一生命館が竣工する三月程前に、大体見当ついたから、矢野恒太社長にこう話したのです。『私は、思う存分やらしてもらって、本当に有難うございました。これで思い残すことはないから、私は死んでもいいんです。』すると、

『まあ死ぬまでやってくれよ』

『11月には確実に竣工するから、出来上ったら、こんないい気持ちはない。この気持ちを長く持続するにはどうすればいいかと思うと、死んでしまうのが一番いいと思いますがそうもいきません』

『とにかくやってくれよ』

『やりましょう』

そうこうしている間に竣工、引越しです。社長も矢野さんから、石坂退三社長に交代されたのですが、竣工の前日、矢野社長へ祝辞を述べに社長室へ行きました。

『御竣工お目出とうございます』

『松本君、御苦労さんでした』

『ところで、君は何か……』

『結構でした。とにかくもうこれでいいです。本当はこの前言ったような具合に、今日ここの屋根の上から玄関に飛び降りて死ねれば一番いいと私は思った。しかし、子供もあるのでそうもいえないんですが、もうこれでいいですから、第一生命を辞めさせて下さい。何とかしますから』

『これで良いですからって、君どうするんだ。』

『どうすると言っても、死んでいく身ですから、良くわからないですよ』

『本当に辞めるのかね』

『ええ、辞めます』

矢野社長が、実に立派な方だったからね、それでここまで、ついて来たのでした。

『これから、もう一遍勤めるといっても、貴方の様な方には、巡り逢えませんか、もうどこへも勤めませんよ』

そうは言っても、商売人になれと言っても私商売は出来ないから、これもしょうがない。

『まあ、自分の覚えたことでやっていけば、子供の教育と、自分の食べるぐらいの事は出来ますから、大丈夫でしょう。それで、のんびりひとつやって見ようかと。人生これでおしまいなんですから』

『君はしかし、実に素晴らしい考え方をするね。』

事務員は、定年までかじりついている』

『私は、かじり付くなどは大嫌いだから無理ですよ』

『それじゃ君、辞めたらいいだろう』

『そうさせて下さい』

『しかし君、何をするんだね』

『何をするかわからないです』

『君は、第一生命がいやか』

『いえ、いやじゃない、とても良い、会社です』

『それなら、第一生命にいたらい』
『いたらいと言っても』
『顧問になりたまえ』
『顧問と言っても、ジジイ見たいだから』
『君ね、今にジジイになるんだから、それでいいよ』
『おかしいな、ジジイみたいで、もっと良い名前ありませんか……』
『顧問技師ではどうか……』

それは良いという事で、顧問技師の辞令をもらったのだが、それが、90歳迄続いている。あとは私の人生にとって「オマケ」なのだし、今だにそうでしょう。

小高 顧問技師は松本さんお一人ですか。

松本 会社には、重役も社員も定年があって辞めてしまう。重役は一任期が2、3年、再任しても、2、3期でしょう。私のようなのは特別で、1人だけです。

社長の御長男が一郎さん、80歳で相談役、この方が社長になった後、こう続いている。他の方々は嘱託などで2年が3回、計6年任期ですが、55歳で定年でしょう。支部長嘱託連中がこう言います。『松本さんはいつまでたっても繋がっているけどどうしてでしょう』相談役が、『あれは、オヤジに頼まれたから仕方ないよ』皆は困ってしまう。

静岡新聞と丹下健三氏

金尾 銀座でよくお見かけしますが、先生は、静岡新聞と御関係がございませんか。

松本 矢野社長の時分に、石坂退三次期社長が連れて来た、稲宮という庶務課長がいて非常に立派な人で、もう亡くなりましたが、この方が静岡新聞の大石光之助社長と非常に仲が良かった。それで始終第一生命へ来て将棋したり、世間話をしたりして、意思疎通を計っていたんだね。私は営繕課長でした。庶務課長の方で建築の話が出ると『松本君ちょっと』と言って私を呼んで、大石社長を混えて一緒に話してたんだ。プライベートな事も、『ちょっと松本君』と言って相談を受け、ずっとやっていたが、それが今だに続いている。

金尾 それでやはり週に一度ぐらい先生が銀座にいらっしゃるんでしょう。

松本 銀座の日本ホームズの隣り、静岡新聞へ行って、建築の話が今だにつながっている。静岡市立体育館、あの三重の建物ですが私が丹下さんを引っ張って来て、私と丹下さんでコンサルタントをしました。また、静岡新聞社は静岡市を応援しているわけです。

金尾 市立体育館は新聞社の応援で出来たのですか。

松本 私は大石社長と話しているでしょう、それで誰か立派な先生がいないか。丹下さんがいいやと言うことになり、私、丹下さんの所に行って『貴方一緒にやりませんか』『そうします。』と、今だに丹下さんとはつき合っていますよ。初対面を過ぎて、丹下さんが、先生と言うんだ。誰の事かと思った。

金尾 それ以来、体育館を設計したり、静岡新聞社を設計したりそのあたりのお話を。

松本 その後、静岡新聞の本社を作った。あれは、今になって良かったよ。土地が50坪しかないんだ。容積率が900%で450坪建てられるわけなんだが、大石社長は一通りの変り者ではないんでね。50坪しかない所へ、12階建を造れと言うんだ。とにかく12階。それで丹下さん『12階だって、しょうがない。』煙突みたいのを、建てちゃってね。丹下さんにやってもらったが、あの建物の延床面積が、450坪です。

いまになると私も気になります。あの囲りにえらい大きい建物が出来てでしょう。しょうがない、こんな大きなもの——、もっとも出来るものはしょうがない。それでも新橋へ降りて見ますとね、その大きい建物と決して遜色ない。あれはかえって目立つ。

金尾 あれはもう大変な看板ですよ。新幹線から見えたり、高速道路から見えたりしまして。

松本 新橋に来るとあれが目標なのだ。その上に静岡新聞と書いてある。あれは非常に傑作ですね。

金尾 余談ですが、竹中藤右衛門の奥さんが先日亡くなられて、95歳でした。

松本 そうですか、95歳でしたか。

そういう建築の話をしていると私達の事が大体わかるでしょう。
(文責・編集部)

建築学科25周年記念祝賀会記録

好天に恵まれた文化の日、我が工学院大学に建築学科が創設され25周年を迎えた。

これを祝して催された記念祝賀が、開館3日目の真新しい京王プラザホテル別館大宴会場で行なわれた。

大庭教授を実行委員長として、各先生方が数十日をかけ準備をし、今日の出度い日を迎えることが出来た。

大宴会場ロビーには、各研究室別の立札をならべ長い受付テーブルが来場者を待ち受けていた。

そのわきに10数年来の教授、卒業生のCOMPの出品作が、ずらりとスマートに展示されている。早々と到来の方々は久し振りにみる仲間の応募作品に見いていた。

出席者総数 450 名

定刻午後6時、吹抜の大宴会場に入る。入口には下元先生、松本先生に贈られる記念メダルが飾られてあった。そのメダルは武藤教授デザインによるサン・ピエトロ寺院の平面図を形どった意義あるもので、出席者にはこの小型が記念品として配られた。

南迫先生の司会で開催に入り、式典は次のように運ばれた。

式次第

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 司 会 | 南迫先生 |
| 1. 経過報告 | 大庭実行委員長 |
| 1. 挨拶 | 1. 伊藤学長 |
| | 2. 今泉主任教授 |
| | 3. 小高同窓会会長 |
| 1. 記念品贈呈 (学長より) | |
| | 1. 下元名誉教授 (92歳) |
| | 2. 松本与作先生 (90歳) |
| 1. 乾 杯 | 下元名誉教授 |

1. 来賓挨拶

- | | |
|----|----------|
| 1. | 岡田元学長 |
| 2. | 梅村建築学会々長 |
| 3. | 松本与作先生 |

1. 在校教授挨拶

- | | |
|----|-------|
| 1. | 波多江教授 |
| 2. | 正木教授 |
| 3. | 武藤教授 |
| 4. | 横田教授 |

1. 来 賓

- | | |
|----|----------|
| 1. | 清水建設松平常務 |
| 2. | 相野谷後援会長 |
| 3. | 伊藤真治理事 |

閉会の辞

山下司主任教授

3時間を経て、山下司主任教授の閉会辞をもっておひらきとなる。

挨拶概要

1. 経過報告

大庭実行委員長

高いところからの挨拶失礼します。

実行委員会は教室会議の数名及び同窓会関係の数名で組織し、企画に時間をかけ意義ある祝賀会とするべく努めて参り、今日に到りました。

このように盛大な集りは、卒業生の皆様、遠方



会 場 風 景

よりおいでの皆様、建築学科設立以来の職員の方々、又現在の教職員、そして卒業生を採用、お育ていただいている関係企業の方々のお集まりを頂き、我々実行委員会として、私より代表して厚くお礼を申し上げます。

実行委員会の誕生は、1カ月前教室会議の席上、今年は25周年に当たるので「何かをやらねば」と話しがあり、急速に具体化され、急ぎょ皆様にお手紙を差し上げたわけです。御迷惑をかけたのではないかと思います。皆さんの熱意でこんなに多勢のお集りをみる事が出来まして、実行委員会として非常に感謝しております。ありがとうございます。

この会も短時間の準備でありましたが、どんな会にするか4つほど考えました。

その1つは、この建築学科は25周年になり、卒業生は実に8,000人になっております。大変なことです。8,000人の方々が全国各地の建築各領域において活躍されています。この25年間1回も建築学科として呼びかけ、会合をしたことがありませんでした。

今回この25周年記念を機会に全員に漏れなく連絡しまして会合を開らこうと考えました。今出席されているこれ程多くの人々が各領域で活躍されて、これは社会における一つの大きな力でしょう。社会の貢献はどれほど大きなものかと考えま

す。

今回の集りは大きな意義になったということが一つ。

それからもう一つは、今まで25年間は夢中で建築学科の基礎づくりでした。私も在職18年になり、いかにして学生を建築界に新しい形で育て上げ、送り出していくか一生懸命夢中でやってきました。

しかし過去を振り返えるということに欠けており、卒業生について考えることが欠けておった。これから本来性をもった質的にも、又社会的にも貢献度の高いものを求めていると思います。その機会として今回の記念祝賀会を将来の出発点の形として意義づけたいことが一つです。

もう一つの問題は、「建築学科25周年の歩み」（とじ込参照）の中にもありますが、工学院大学は93周年になります。建築学科はその一部であります。90周年記念事業をさらにサイドより応援していきたいという問題です。

もう一つは、建築学科として建築界に8,000人送り出しましたがこれから送り出していく建築学科の建築技術者のために、出来れば奨学基金というようなものを一つの事業としてやっていきたい。

このように四つの点を委員会の会議で運営企画しました。幸いに本日は多数のお集りを頂きこの



大庭実行委員長挨拶



小高同窓会長挨拶



伊藤学長挨拶

成果を与えられたような感じです。非常に感謝しております。

最後にこの記念すべき25周年記念事業に一昨日開館したばかりのこの真新しい京王プラザホテル別館を会場として与えていたわけです。なんと大いに意義あることではないでしょうか。なお8,000人の卒業生の内住所不明が半数おり、残念ながら案内状が差し出せませんでした。しかし連絡なく御出席頂いておる方々には実行委員会よりお詫び致します。これからは連絡が出来るよう充実を図っていきたいと考えております。

今後は時間の許す限り、御歓談におすごし下さい。実行委員会を代表してお願いいたし、経過報告といたします。どうもありがとうございました。(拍手)

○伊藤学長

伊藤でございます。

御来賓の皆様、どうもありがとうございます。なお、開設に努力されました方、それからそれを育てて下さった方、厚く御礼申し上げます。私たちが今日、教職員としてここにあるのは、そういう方たちのおかげであります。多数の卒業生諸君がここに来て下さいまして喜びを分かち合えるということは、大変うれしいことです。

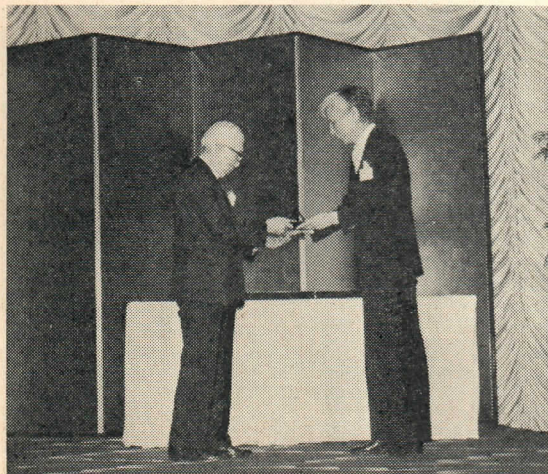
御承知のように、本学の前身は工手学校でございます。25周年ごとに記念の式典をするのは、開

設以来の習慣のようでございまして、工手学校の25周年記念事業は大正2年に行われました。そのとき建築をすでにかなりやっておられた方は、ここに御出席になっておられる下元先生と松本先生だろうと私は思います。もうすでに90歳を超えておられます。そのとき、記念の講演として、岡田信一郎が講演をいたしました。場所はちょっと正確に覚えておりませんけれども、円山公会堂ではなかったかと私は思います。その当時の、ちょうど転換期にあった新しい建築道を、そのとき彼は講演したわけでございます。岡田さんはそのとき30歳でした。そうして、その当時、新聞で話題になるようなことを彼はその席で話をいたしました。

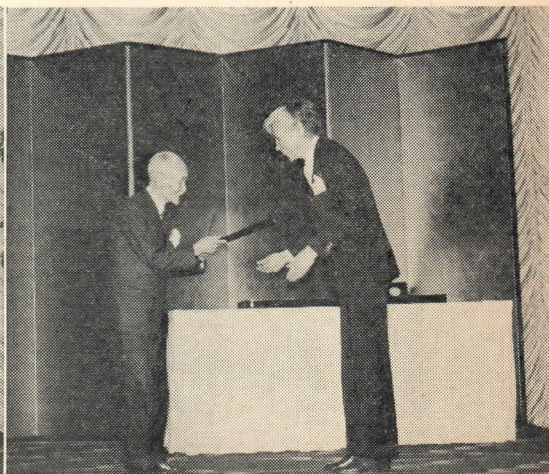
その点、私はここでそれに匹敵するようなことは申し上げることはできない、ということを変に残念に思いますが、ここに25周年の式典を迎えたことは、いま本学にいる私たちに対して、次の25周年は画期的な転換点を持つという決意を披歴するとともに、皆さんの御期待に沿おうという願いを込めてこれは開かれているんだ、と私自身は信じております。

簡単ではございますが、これをもってあいさつといたします。(拍手)

(文責 金尾)



松本先生授与式



下元先生授与式

これからの建築について語る

主任教授 山下 司

—— これからの建築について、お話を伺いたいのですが。

山下 これからの建築ということは、大変に難しい質問だ。現状はある意味で、インターナショナルスタイルに対する反省の時期である。これがポストモダニズム、コンセプチュアルアーキテクチャ、古い建築の見直しなどの兆候として表われている。

インターナショナルスタイルとは、過去のものを否定し時代に合った新しいものを創ろうという考えからきていると思うし、それは、われわれの歴史的遺産から断絶することになるかも知れません。

われわれは過去の文化と断絶して生きることは出来ないと思います。過去を生かしながら連続した上で、ものを創っていくということが、ものを創る人達の態度ではないでしょうか。

たとえば、この前の新建築会館のコンペの時に、考えたことは、現代は科学、経済の効率だけにとらわれて来たようだが、そういうものではなく、宇宙も含めた歴史の中での総合的なものでなければならぬと思っていました。

現在問われているものは、技術と芸術の融合であり、言葉、音楽、知的遺産、近代工学技術等人間の持っているものの総合的な融合に立脚した建築物を作らなければならないと思います。

—— 今後の日本の建築技術者がやるべきことについて。

山下 アジアは世界で最も人口稠密な所だが、日本はその中にあって、先ずどのような協力が出来るかを考えるべきでしょう。

それには日本の建築家も教育も、国際的になら

ないといけなと思います。

今迄日本がやって来た事は作ったものを売り込むだけだった。それは近視眼的です。

その点アメリカは、フルブライトの制度で中進国、発展途上国から優秀な学生を募り、ホストファミリーの制度を作って、親代りとして親切に面倒を見ます。

先ず個人的レベルで交友を計ります。そして国内の学校で、各分野の教育を施しています。そこで構造設計等を教えている教授は、もちろんアメリカの規格を用いているので、卒業後帰国して設計をするときも、使用するのはアメリカ規格なんです。

アメリカの製品を輸入してこれを使用する事になり、巡っては、輸出も延びることになり、このような長期的視野に立った国際教育の制度を作りましたのです。

今後日本が経済的に成り立っていくためには、中国とアジアがなかったら日本はだめになるでしょう。アメリカ、ヨーロッパだけを相手にしていたらだめですね。

しかも日本はアジアの一員なのに、このままでいったら日本の20年先は大変な事になってしまうでしょう。

それは、資源がないのだから、知的文化と知性しか売れるものがないのです。

歴史はくり返すといいますが、モヘン・ジョダロもそうだったし、オスマントルコの首都であったイスタンブールが、かつては美しい世界一の町だった。今のヨーロッパなどは、野蕃国であったわけです。そういう所に行くと見るとシルエットは素敵らしく美しい。だが町の中へ入ってディテ

ールを見ると、きたないんです。かつてはピカピカの靴をはいていたのが今日ははだして歩いている。その点日本の現状はよいが、いつか歴史は繰り返し、大変な事になるのではないのでしょうか。

—— 卒業生のコンペが近年成績が非常によく、ある意味では建築科全体がまとまってきた象徴ということではないかと思いますが、

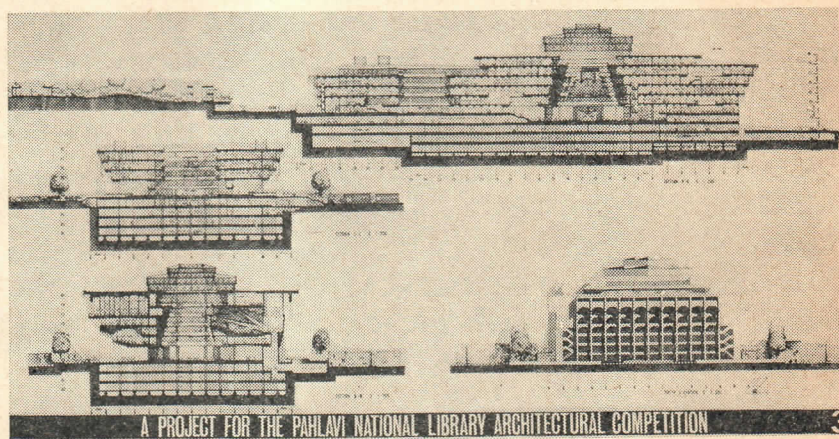
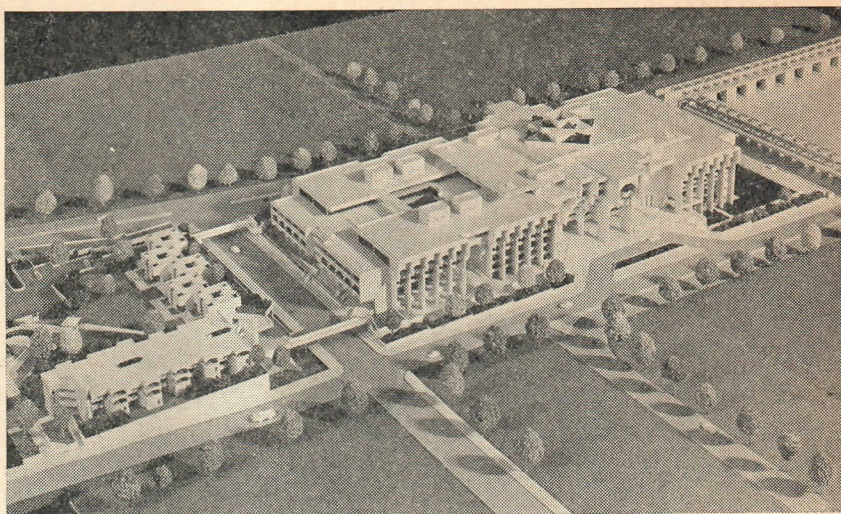
山下 例えば私の新建築会館コンペの例でいうと、何の思想性も創造性もない時代が象徴になると云うのではなく、本来新建築会館というものは、非常に啓蒙的な形というのが当然あっていいと思った。

私の発想では、各時代の建築を全部集めて、未来を志向したものを作ったらおもしろいと思ったんだけど。

あのコンペを応募するときに、そういう趣旨を出せばよかった。建築の形というものが文化の形を残しているわけだ。

いうなれば、建築というのは、政治、経済、文化、芸術の総合として残っている。そういうことをコンペの主催者の理念として、もう少し明確に出すべきだったのではないか。

—— あの場合、主催者はできるだけそういうものを控えて、いままでのコンペに対する反省が多分にあったんでしょう。



パーレビ、イラン国立図書館競技設計応募案

たとえば、国立劇場のときも、いろいろ問題となりましたね。

山下 それはわかるよ。けれども早くいえば、審査員の選び方に理念がなかったということだ。あの時点で、歌舞伎とか、日本的なものをやるということは、それほど明確でなかった。

審査員のメンバーを見て、審査員をよく知っていてやらないとコンペには入らない。コンペに魅力がなくなってきたというより、魅力のあるコンペが少なくなってきた。

いうならば建築家としてのロマンがない。

—— 先生が具体的に設計なさる時にどうい

態度でなさるのでしょうか。

山下 やはり、環境の条件と建物の種類、かくあるべきだという概念。イメージはもちろん出て来るけれども、それを先にやると、内容のないものになる。むしろイメージをセーブしながら、そういうコンセプトに対してどのような形として提示できるか。そういう思考をしないと、最初にイメージなどを考えると陳腐になる。

この前学生ガイダンスで、(概要を付記)新入生に対して、建築学科とは、その将来、望ましい勉強態度などについて説明していますが、いままであまりコンペのことは言わなかったが、最近度々卒業生がコンペに入選する。また海外で活躍している。最近のコンペでも入選、ほとんどトップクラスだ。工学院大学の建築学科は一体どういう設計、製図教育をやっているのかと、話題になって、各大学の先生をはじめとして、みんな聞きに来ました。(付)この9月にも、造形教育のことで学会で話をした。

—— 卒業生に対して一言お願いします。

山下 卒業後10年や15年も経つと社会に夢を無くする人が多いんじゃないかと思う。その時になぜ夢を無くしたのか、自分の理想をどうしたら達成出来るのか、反省する人がいるかも知れない。日本ではその反省をするチャンスが少ないと思う。1週間1回でよいから反省の時間を作るという事が大切だ。

自分のやっている事を反省し、理想をもっていないとどんどん環境の中に埋もれてしまう。

誰でもが、美意識を持っている人ならば、設計でも現場へ出ても、材料屋になっても感性を養わなくてはいけない。いつもいいものを見なければいけない。

ブルノータウトの両親は、誕生日にタウトに、最も美しいものを見せるようにしていた。それでタウトは日本に来て、誕生日の習慣で素晴らしいものを見たいといって、高崎にいたわけだけれども、上野さんに紹介されて桂離宮を見た。僕も学生に、誕生日だけでもきれいなものを見なさいという。感性と教養を高めてほしい。

あらゆるものが分化されてしまって、職業の範囲で割り切っちゃって、ものを大きく見ることがない。時代をパースペクティブに、将来を見通す力が必要だと思う。

それから、どういう生活環境が望ましいかという概念、コンセプトを持って、感性でサポートしながら、ものを作ることが大切だと思う、そういうものを教えなきゃいけない。

そこで、私自身の過去を見て見ると、5年毎に目標を設定した。5年後に大学院を卒業して、10年目にエール大学のデグリーを取った。15年目に日本の中でも認められる作品をと考え、箱根のコンペで入選した。

そういう意味では、5年毎の目標は立て易いし、そういう計画を建てて、実現し、社会に役立ってもらいたい。

ガイダンス(新入生へのことば)より抜粋

「建築とは、人間生活の空間的総合である」
(フランク・ロイド・ライトの言葉)

建築を創る人々には、人間生活全般にわたっての広い視野と高い見識、確かな技術と豊かな感性が要求される。本学の建築学科に学ぶ諸君は、この生きがいと使命感に燃えてもらいたい。

この期間に各系列の科目を充分に理解し、人文、社会、自然、芸術等に関する教養書を、しっかり読んでほしい。岩波文庫、岩波新書等特に推めたい。そして各種の美術展等美しいものを常に見、感じるよう心掛けてほしい。本学の建築学科は毎年行われる建築学会主催の設計競技を始め、国際、国内の各コンペティションに常に上位入選し、その点我が国の建築学科の中でもトップレベルにある。

20世紀もあと20年で終わろうとしている。諸君がもっとも活躍する時代は21世紀であろう。現状を適確に認識し、将来を見通す見識を養い、それを充分に生かして、古い文化を大切にしながら新しい秀れた文化の創造者になってもらいたい。

第14年度事業報告及び第15年度事業計画

第14年度事業報告

1. 各部会活動について

- 2. 名簿発刊について（新卒業生）
- 3. 準会員の援助について
- 4. 第14年度会務について

第 14 年 度 決 算 報 告

自 昭和54年10月1日
至 昭和55年4月15日

収 入 の 部		支 出 の 部	
1) 会 費 等 収 入	1,774,000	1) 会 誌 発 刊 費	0
準会員入会金及び会費		2) 各 部 会 費	40,000
1,645,000		同窓会援助金	
正会員入会金及び会費		3) 名 簿 発 刊 費	219,100
129,000		印 刷 費	195,000
		振込手数料	100
		準備費（アルバイト）	24,000
2) 預 金 利 息	579,085	4) 本 部 運 営 費	34,090
普 通 預 金		会 議 費	26,630
48,517		消 耗 品 費	360
貸付信託収益		通 信 交 通 費	7,100
530,568		5) 準 会 員 援 助 金	100,000
3) 雑 収 入	0	学 内 コ ン ベ	
0		学 祭	50,000
		50,000	
		6) 総 会 運 営 費	574,148
		印 刷 費	493,478
		送 料	5,670
		懇 親 会	75,000
		7) 学 園 同 窓 会 分 担 金	710,000
		予 備 費	
		8) 予 備 費	52,340
		餞 別	20,000
		二重払い返金	31,000
		正会員郵便振込手数料	1,340
		9) 第14年度積立組入金	623,407
合 計	2,353,085	合 計	2,353,085

積 立 金 内 訳

積 立 金		内 訳	
1) 前年度までの積立金	24,128,031	1) 三井信託銀行	21,804,692
2) 第14年度積立組入金	623,407	貸付信託益	
		21,000,000	
		804,692	
		2) 第一勸業銀行	2,458,521
		普通預金	
		2,453,429	
		当座預金	5,092
		3) 郵便振替口座	305,940
		4) 現 金	137,285
合 計	24,751,438	合 計	24,751,438

5. 創立90周年記念事業の協力について
6. その他

第15年度事業計画

1. 同窓会誌「ニッチ」7号発刊

第15年度予算案

自 昭和55年5月1日
至 昭和56年3月31日

収入部	1) 会費収入 準会員からの会費 正会員からの会費	1,900,000 100,000	2,000,000
	2) 預金利息 普通預金 貸付信託	50,000 950,000	1,000,000
	3) 雑収入 広告代 名簿代予約	500,000 500,000	1,000,000
	4) 積立金引出		3,000,000
	収入合計		7,000,000

支出部	1) 会誌発刊費		1,650,000
	2) 各部会費		100,000
	3) 名簿発刊費 全同窓生名簿 新同窓生名簿	2,100,000 250,000	2,350,000
	4) 本部運営費 会議費 消耗品費 通信交通費 雑	75,000 10,000 25,000 30,000	140,000
	5) 準会員援助金 学内コンベ 学祭 八王子祭	50,000 50,000 20,000	120,000
	6) 総会運営費 印刷費 送料 懇親会	500,000 500,000 100,000	1,100,000
	7) 校友会分担金 運営費分担 会報分担その他	977,000 463,000	1,440,000
	8) 予備費		100,000
	9) 積立金組入		0
	支出合計		7,000,000

2. 各部会活動の促進，クラス，研究室OB会
および厚生部会活動の後援
3. 名簿の発刊
4. 準会員への援助
5. 講演会，懇親会等の開催
6. 創立90周年記念事業の協力
7. その他

第14年度会務報告

自 昭和54年10月1日
至 昭和55年4月15日

第59回 運営委員会（昭和54年11月19日）

1. 第13年度決算報告
2. 第14年度事業計画および予算案
3. 新校友会設立について
4. 新運営委員および役員選出について
5. 会計年度変更について
6. 90周年記念募金協力について

第13年度 会計監査会（昭和54年11月20日）

第14年度 定時総会（昭和54年12月15日）

1. 第13年度事業報告および収支決算の承認に
ついて
2. 第14年度事業計画および予算案の承認につ
いて
3. 会則改正の件（第2条および第30条）

第60回 運営委員会（昭和55年3月4日）

1. 工手学校，工学院の建築系会員の運営委員
選出について
2. 相談役選出について
3. 名簿編集について
4. 会報発行について
5. 90周年記念募金の協力について
6. 運営委員の再構成について

第61回 運営委員会（昭和55年4月17日）

1. 第14年度決算および事業報告について
2. 第15年度予算案および事業計画について
3. 90周年募金推進委員選出について

役員会（昭和55年3月3日）

1. 工手，工学院の建築系同窓生の運営委員の
すいせんについて
2. 運営委員会組織のあり方について
3. 90周年記念事業募金の協力方について

大正6年築地回想

鈴木啓之(80歳旧名仙治)

築地の工手学校は本願寺裏手に架る木造の備前橋を渡った小田原町にあった。今から90年も前に創立した中堅技術者養成の専門学校、しかも日本最古、最優秀、東大の教授兼任の優秀な教育者揃い、教学の厳格と内容のむずかしさ(大学程度)で有名な学校であった。それだけに蔵前高等工業に次ぐ権威があったので入学志望者も全国から増大し生徒の意気も極めて軒昂、大いに勉強したものだ。

各学科とも予科1年(1年2期)、本科(1年半で3期)計2年半で卒業のわけだが、生徒の年齢と学歴不揃いに加え、学科が厳しいので予科も本科も年2回の試験に合格者半数、判で押したように半分は落ちて留年か落第者になるような厳しさは学校の名声と卒業生の実力を高く買われた。そして社会に出てから一段と光りを放ち、目上の引立も社会の信頼も深いその経過は言うまでもなく各界ともに高い地位を築いて行ったようである。

朴歯の下駄ばき備前橋を渡る

予科は昼間、本科は主として夜間授業、多くの生徒は緋(かすり)の着物に袴を穿き、朴歯の下駄をはいて遠くから歩いて通学したものだ。しかも学用品と丁定規を小脇に抱え木造の備前橋をガタガタ音を立てて威勢よく渡った思い出は、関東大震災前に卒業した連中の頭の中に残

っていると思う。つまらない回想だが昔を偲ぶに足る懐かしいものとする。

私は建築学科大正6年夏56回卒なのでその間の情味を充分知って居り頭に焼付いている。この事情を現今の情勢に比べ、どう判断するかは後輩諸賢の良識に任かせるよりほかないが、苦勞は恰がち悪いものではない、結局有難い経験だと老後に及び再認識される。

六葉会のメンバーに想う

在学中仲の良い友達やクラスメートとの交際は、その時の興味よりは後々有益と嬉しい便りとなり嬉しい思い出あるいは世渡り上手懸りともなる。しかし在学期間僅かに2年半、本科に入り後半は忙がしく交友を暖める暇もないが、私たち6名の者は同窓者を加え僅か8名のグループを六葉会の名で結成し、勉学の共同作戦に社会に出てからの交友を愉しむことを申合せ、見学、お遊び、卒業試験にもお互いに便利親交を重ねた。その盟友は下記の諸氏だが○印は既に他界したので残るは半数まことに寂しい

○三枝知良(間組) ○佐藤政雄(清水組)

○芹沢重雄(宮内省) ○小崎信邦(自営)

篠井律平(清水建設) 田畑 昶(清水建設)

藤沢包太郎(自営) 鈴木啓之(鈴木商行)

各学科を通じ大正9年築地回想の同門少くないと思うが、できれば手をつなぎたいものであ

“スポット”

1. 56年4月1日付で専門学校長に主理、鈴木敬治郎先生が就任され、前校長、小浪博先生は専門学校名誉校長に就任されました。
2. 学校法人 工学院大学理事長に4月1日評議

員会において、東大名誉教授、高山英華先生が新理事長に推薦され、就任する。

新理事長挨拶に、「学園将来計画に努力したい」との挨拶があった。

尚前島前理事長は、理事として再び活躍される。

■編集後記—

5年振りとかで今回第7号を発刊することに、当初5年振りのことで編集子は数回デスカスし、どうやら昨年の晴れの建築学科25周年創設を記念したものを中心にオリエンテーションを極めた。

さてその25周年記念号に取りかかってみたが、心もとなく発刊にこぎつける、その一つとして記念式典に配布されたものを折込んで式典に欠席された方々に本学の歴史を改めて知ってほしいので掲載した。

更に松本与作大先輩の本学にまつわる話をのせて、建築学科の価値と先生の建築への情熱を記してみました。

私は、合併により、建築学科同窓会に編入され、今回初めて「ニッチ」の編集に参加させて頂く光栄にあずかり、出来るだけ「ニッチ」の伝統を存続させていくことに努力をしてみました。然し今ここに会員諸氏の御批判をあおがなければならないと思っている。(金尾)

この度は、同窓会誌の編集をさせていただきましたが、大変なボランティア作業だと思うに付け、先に出した会誌の記事を読み返し、ふり返えり、これは、希望有志が編集すべきとつくづく思いました。

校友会長、大学理事長のお話を頂戴する予定でしたが、次期理事長が変わりましたために、これを掲載出来なかった事が大変残念です。次号を編集して下さる方に引継ぎます。(愛川)

建築学科同窓会誌創刊号(当時は未だ名称が決まっていませんでした。)の時手を染めて以来13年振り(1968年創刊)まで再度編集に狩り出されました。これも出来ればピンチヒッターと云うことで次号は又誰か良い人に引継ぎたいと思うのですが、ボランティアですので強制も出来ません。どなたか希望者がありましたら名乗り出てほしいと思います。もしいらっしゃらないと次号も又やらされそうです。どうぞお助けを……。 (宮崎)

広告協賛お礼

今回、発行ニッチに協賛いただきました各社には、工学院卒業生が在社し、活躍しています。出来るだけ皆さんの多くの引合いを出していただけますなら、協賛して下さった意味があると思います。読者のお礼の意味を兼ねて、引合、見積り等の要求を出してあげて下さい。

以 上

ニッチ VOL 7 昭和56年 5月20日

発 行 工学院大学建築学科同窓会
東京都新宿区西新宿 1-24-2
〒160-91 TEL 342-1211 内287

編集者 愛川 高朗 金尾 武彦 宮崎 勝弘

印刷所 弘 報 印 刷 株 式 会 社
東京都中央区入船 1-5-11
〒104 TEL (03) 552-9731 (代)

建築土木設計施工

新海工業株式会社

常務取締役工事部長 森山 健次 (F建1)

新海一級建築士事務所

本社 東京都中央区銀座4丁目8番4号(三原ビル)

☎104 電話 (03) 563-3606 (代)

日立プラント建設株式会社

電機営業所

営業部長 榎本 忠良 (F電3)

本社 東京都千代田区内神田1丁目1番14号

日立鎌倉橋別館

☎101 電話 (03) 292-8111 (大代)

——土地の有効な利用法, すばらしい建築計画をあなたに——

住宅総合企画株式会社

代表取締役
一級建築士 金田 昭治 (G建1)

本社 神奈川県横浜市戸塚区矢部町969

セキトビル2階

☎244 電話 (045) 864-4469 (代)

未来を築く総合建築業

前島建設株式会社

代表取締役 前島 為司 (A建72・工学院大学理事)

本社 ☎160 東京都新宿区四谷1-1 電話 (03) 353-8251(代)

工事部 ☎160 東京都新宿区四谷1-11 電話 (03) 353-5721(代)

九州支店 ☎812 福岡市博多区博多駅東2-5-19 サンライフ第3ビル
電話 (092) 473-8466・8467番

・ スペースプランニング 建築計画・土地の有効活用

こんなとき当社の経験豊かな
コンサルティングスタッフが皆様の
お手伝いを致します

お気軽に 03-407-5371 にお電話下さい

工学院大学 出身者名	34年卒業	小大	高場	鎮一	夫範	40年卒業	高五十	宮嵐	健良	司博	48年卒業	坂内	井田	俊修	昭一
	36	〃	藤	大	岩	42	〃	小野	政	弘	50	〃	山下	幸	一
	37	〃	小	牧	久	43	〃	柏原	建	三	54	〃	坪田	耕	治
	38	〃	長	熊	真	43	〃	中山	浩	三	54	〃	小川	厚	一
	39	〃	赤	沢	夫	47	〃	雨宮	寿	小	55	〃	野		
	39	〃		川	重	48	〃				56	〃			



白石建設株式会社

SHIRAI SHI CONSTRUCTION CO., LTD.

東京都渋谷区渋谷3-1-4 第百生命渋谷ビル

しゃれたデザイン 広い用途

イギリスからやってきたディスプレイユニット

エキスポシステム

エキスポシステムは、イギリスのマラー・ヘイリー社が開発した、たいへんすぐれたディスプレイユニットです。日展は、同社と特約を結び、日本のみなさまにこのエキスポシステムをお取り次ぎしております。展示場やショールーム、公共施設、お店はもちろん、学校、幼稚園でも幅広くお使いいただける、いろいろな種類がそろっています。カラフルで、楽しく、個性的なディスプレイをエキスポシステムでぜひどうぞ！

●組み立てはとてもしかんたんです。工具や特別な技術は不要。大きなものも、小人数で手早く組み立てられます。

●単純な部材をもとに、さまざまな目的に応じた多様な組み合わせができます。

●機能性はもちろん、デザイン性にもすぐれ、人目を引くしゃれたディスプレイができます。

●材質はどれも、しっかりしたものを使っています。丈夫で長もちし、何度でも組み立て・解体でき保管をするのにも大きな場所をとりません。

●各システムのパネルには、マラー・ヘイリー社が開発したニュータイプのクロス・エキスポループを上張りすると、さらに便利です。

★ 個々の製品については、くわしく内容をご紹介したカタログを用意しております。ご希望の方は日展（〒110 東京都台東区東上野6丁目21番6号 TEL. (03) 843-4111 (代)）へ電話かハガキでご請求ください。

ExpoSystems 日展
日本総代理店

工学院大学へ、展示パネル納入
〈営業部 斜木〉

東京店 東京都台東区東上野6丁目21番6号 〒110 電話 (03) 843-4111
大井営業所 東京都品川区南大井5丁目4番21号 〒140 電話 (03) 762-1446
本社 大阪市北区万才町3番7号 〒530 電話 (06) 361-2031代表
名古屋店 名古屋市中川区日蓮2丁目3番5号名鉄交通ビル 〒454 電話 (052) 322-3551
名古屋ディスプレイセンター 名古屋市中村区鵜野町2丁目22の1 〒453 電話 (052) 471-5166代表
金沢営業所 金沢市尾張町2丁目2番10号荒木ビル 〒920 電話 (0762) 22-3707代表
神戸店 神戸市中央区御幸通6丁目1番12号三宮ビル東館 〒651 電話 (078) 232-3731代表

三元建設株式会社

代表取締役会長 **西 野 貫**

代表取締役社長 **西 野 泰**

本 社 ☎151 東京都渋谷区本町1丁目13番1号

電話 東京 (03) 377-1401(代)

出張所 ☎270 松 戸 市 新 松 戸 6 丁 目 51 番

電話 松戸 (0473) 45-2541

工学院大学出身者

卒業年度

研究室名

名 前

37年

樋口研究室

西 野 泰

39年

堀越

今 野 興

53年

武藤

森 田 雅

56年

山崎

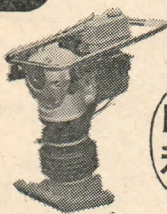
青 木 一 功

タンパランマー

RT・75型

エンジン直結式
オイル自動循環式

- ベルト掛け廃止
- ショックアブソーバ廃止
- グリスアップ全廃
- 内部シリンダー廃止
- コイルばね数減少



振動ローラ

両輪・駆動・振動

アスファルト舗装
サイド転圧可能

MV-30型 3.0t
MV-26型 2.6t
MUS-12型 1.2t

明和



バイブプレート

アスファルト固め
路面整形・補修

P-120型 120kg
P-90型 90kg
P-85型 85kg
VP-80型 80kg
VP-70型 70kg
KP-60型 60kg



SPRINT 振動ローラ

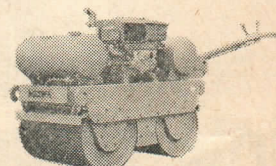
センターピン方式
アスファルト舗装最適
MUC-40型(4t) (前鉄輪・後タイヤ)
MUC-40W型(4t) (前後共・鉄輪)



ハンドローラ

上下回転式ハンドル・全油圧

MRA-65型 650kg
MRA-75型 750kg
MRA-85型 850kg



株式会社 明和製作所

(カタログ送呈)

川口市青木1丁目18-2 〒332
本 社・工 場 Tel. (0482) 代表(51) 4525~9
営業所・東 京・名古屋・大 阪・広 島
福 岡・仙 台・札 幌

社 長 月 原 貢 (機58回)

DAICHI STAINLESS INTERIOR

■営業種目

スモーキングスタンド
ダストボックス
サイドボックス
レインスタンド
プラントボックス
テレフォンスタンド

ホールスタンド
パーティションベース
サインスタンド
卓上トレイ
シリーズ製品群

株式会社 ダイチ



〒135 東京都江東区東陽3-24-14 TEL03/647/1185(代)

代表取締役社長 鈴木 進

現代建築空間に今も生きつづける

Le Corbusier の 家具

ル・コルビジェ

Cassina



ル・コルビジェ、リート・ヘルト、マッキントッシュバウハウスなどの巨匠シリーズをはじめ、現代を代表する有名建築家、デザイナーの作品を数多く取扱っております。



interdecor

INC.

株式会社 インターデコール

本社・ショールーム 〒107 東京都港区北青山1-4-6 インターデコールハウス TEL-03-470-0041

営 業 品 目

鉱物資源開発及生産，自動車部品輸出入，
不動産業，映画配給業

榊 原 興 産 株 式 会 社

代表取締役社長 足 山 剛 一 (E I 化 1)

本社 東京都港区北青山3丁目11番14号
東信青山ビル3階
☎107 電 話 (03) 406-8 5 7 1 (代)

企画から
印刷・製本まで

- * 学協会誌印刷・製本
- * 医学書・理工学書
- * 研究報告・随筆・詩集
- * カタログ・その他



明石印刷株式会社

東京都新宿区下落合1丁目9番5号
電 話 3 6 2 - 0 2 6 4 (代表)

LPガス即日納入

現場事務所向け、引越し用向け、電話相談良し
日通リビングセンター (ガス器具取付・配管工事一式)

株式会社 昭光製作所

LPガス主任技術者 小野塚 政雄 (機93)

東京都プロパンガス相談員 LPG協会技術員

〒173 東京都板橋区常盤台4-20-2 電話 (03) 933-4825

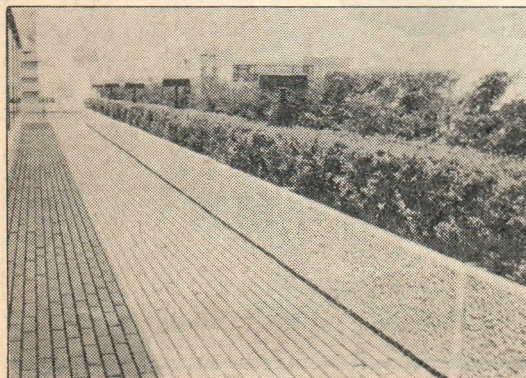
SEIBU

株式会社 西武百貨店

営業品目 内装工事, 家具工事, 舞台装置, お中元, お歳暮, 商品見本等のレイアウト
企画書作成, プライタル家具, 制服, 体育館内装置, 図書館家具, その他百貨
※ 美術館, 博物館用特殊内装材 (ノンホル, ミュージライト)

〒171 東京都豊島区南池袋1-28-1 電話東京03(983)5111大代表
〈外販部商事3部建装課 愛川〉

人工地盤に豊かな緑が欲しい



東神GRCプロセンター

——— デザインコンクリートの専門メーカー ———



株式会社 **東 神**
GRC事業部

本社営業部 〒152 東京都目黒区中央町2-35-13 ☎ 03(715)5566(代)
埼玉工場 〒362 埼玉県上尾市西宮下3-5 ☎ 0487(74)7386
営業所 関東 ☎ 0487(72)0151 千葉 ☎ 0472(31)0044 福島 ☎ 0245(67)2151
大阪 ☎ 06 (998)8240 多治見 ☎ 0572(23)1101 札幌 ☎ 011(861)9467

